

タイ人留学生のコード・スイッチングの使用実態

～文法的観点に注目して～

Siriporn Iampongsai

(原稿受理日 2004年4月16日)

1. はじめに

現在、日本語学習者をはじめ、日本に滞在している外国人の数が年々増加している。二言語環境下にいる彼らの言語運用を観察すると、周りの人とコミュニケーションを図る際、発話相手や場面などによって母語と日本語を巧みに切り替え、コード・スイッチング（以下、CS）を行っていることに気づく。

一方、タイ社会は多民族で構成されている多文化多言語社会であり（Prasithrathsint 2002）、タイに滞在している外国人も増加している。また、中国系タイ人が中国語とタイ語のCSを行っている風景も昔から一般的に見られる。中国語とタイ語以外では、祖先の言語（マレー語、カンボジア語、ラオス語など）とタイ語のCSを頻繁に行っている人も少なくない。さらに、日本語学習者をはじめ、さまざまな言語の学習者が目標言語と母語であるタイ語のCSを行っている。

このように、日本においてもタイにおいても、二言語使用者は二言語と接触しながら、CSを行っている傾向があると言える。彼らのこのような言語行動を理解するためにも、CSの使用実態をまず明らかにする必要があると考える。彼らが相手とコミュニケーションを図る際、それぞれのCSはどのような文法的なルールや構造を持っているのであろうか。

そこで本研究では、日本やタイに滞在している二言語使用者の用いるCSを対象に、どのような文法構造・文法的なルールが認められるかを明らかにしたい。その第一段階として、日本語を学んだ経験がある日本在住のタイ語母語話者の留学生の母語場面における日本語へのCSの使用実態をまず文法の観点から明らかにすることを目指す。

2. 先行研究

これまでのCS研究はバイリンガル・コミュニティを対象として多く行われてきた。文法的観点、機能的観点、アイデンティティに注目した研究などが見られる。しかし、本研究では、CSの使用実態を文法的観点にそって明らかにすることを目的とするため、「文法的観点」に注目したCS研究のみを概観する。文法的な観点に焦点を当てたCS研究は、これまで多く行われている。以下においては、CSパターン、CSの文法的制約についての先行知見の整理を試みる。

まず、CSパターンに関しては、多くの研究でCSを文中（INTRASENTENTIAL）と文間（INTERSENTENTIAL）の2類型に大別している（Poplack 1980、Nishimura1995・1997、Jisa2000、MaCSwan2000など）。文中のCSは文や節の境界内部で起こるCSを指し、文間のCSは文と文の間で起こるCSを指す。一方、CSをさらに細かく分類している先行研究も見られる。岡(1995)は

CSを付加語句、文間、文中という3つのパターンに分類している。岡では、付加語句は、付加疑問、感嘆詞、挿入語句を指し、殆ど統語的な制約なしにいろいろな位置に挿入できると述べている。また、名詞のような単独項目を文中と文間のCS以外のものとして扱っている研究もある (Sankoff1998、Bakus1996、ナカミズ2003など)。ナカミズ(2003)によると、挿入型CS⁽¹⁾とはA言語の文法構造に影響を与えないような形で挿入されるB言語の単独項目のことを指す。また、ナカミズは挿入型CSとしては、名詞が最も多く見られるが、話し手が感情やその瞬間の主観的な印象を表す場合には形容詞と感嘆詞も見られると述べている (ナカミズ2003)。このように、CSは文のさまざまなところで行われており、CSパターンの分類は研究者によって異なっているが、岡の「付加語句」やナカミズの「挿入型CS」の切り替え位置を考慮すると、これらも文中CSとして扱えると考えられる。

また、これまでのCS研究において、CSにさまざまな文法的制約が見られる。ここでは3つの制約について述べる。まず、ニューヨーク在住のペルトリコ人を対象としたPoplack et al.(1981)は語順の制約について提唱し、自由形態素制約(Free Morpheme Constraint)と等価的制約(Equivalence Constraint)に分けている。自由形態素制約では、ある言語の語彙がもう一方の言語に音韻的、形態素的に適応されていない限り、語彙と隣接の形態素の間で切り替えが起こらない。それに対し、等価的制約では、両言語の語順が一致しているところでのみ切り替えが起こり、それ以外のところでは起こりにくい。このように、両言語の語順が一致していない場合は借用⁽²⁾が見られるが、両言語の語順が一致している場合はCSが見られると解釈できる。次に、Di Sciullo et al.(1986)は2つのカテゴリーに支配関係が存在する場合、CSが起こらないという支配・束縛アプローチ (Government - Binding Approach) について述べている。つまり、語彙と語彙のように支配関係がない場合、その間でCSが行えるが、数量詞や否定辞や助動詞といった機能的な役割を果たしているものと、それぞれの語彙の間に支配関係がある場合、その間ではCSが起こらない。そして、マラッタ語と英語を対象としたJoshi(1985)はマトリックス・ランゲージ・アプローチ (Matrix Language Approach) を提唱し、CSが基盤となる言語 (Matrix Language) と埋め込まれる言語 (Embedded Language) の成分の組み合わせから成り立っていると述べている。Joshiの資料では、マラッタ語が基盤言語であり、マラッタ語の中に英語を埋め込んだCS文の例が観察されている。Joshiの考え方からすると、CSの文法構造は基盤言語の文法構造を維持する必要があると考えられる。このように、CSはさまざまな制約に関わっているが、それぞれの制約によって文法的なルールが形成されることが考えられる。本研究ではCSにさまざまな文法的ルールがあるかどうかを検証したい。

3. 本研究の目的

大学での日本語学習課程を終えたタイ語を母語とする留学生同士の電話会話資料を用い、彼らの会話をタイ語から日本語へのCSが見られるか、見られるとしたら、それぞれのCSはどのように行わ

れているか、どのような文法的なルールを持っているかを明らかにし、タイ語から日本語へのCSにおける文法上の特徴を提示したい。

4. 調査の概要

4.1 調査資料

タイ人女子留学生同士の電話会話（30組）をデータとして使用する。本研究では、言語切り替えに注目することが目的なので、身振り手振りなどの非言語行動を除くために、電話会話をデータとした。また、Hoffman（1991）は、CSは非公式場面において、教育的・倫理的・社会経済的な背景を共有している親密な関係者同士で頻繁に観察されるとしている。そこで、本研究では、電話会話の対象者を共通の言語的・文化的背景を持つ親密な関係の者同士になるように設定した。収集方法は親密関係のタイ人同士に20分間のタイ語をベースにした一般的な自由会話をするよう指示を出し、対象者に話してもらった。しかし、実際に収集された資料を観察すると、タイ語が主に使われたタイ語ベースの電話会話だけでなく、日本語とタイ語が同程度に使われたベースがない電話会話が全体の3分の1の割合で見られた。本研究では、タイ語ベースのデータでも、ベース言語がないデータでもタイ語から日本語へのCSが多く行われていたので、分析する際、両方のデータを分析対象とすることにした。

4.2 対象者

対象者は日本に滞在しているタイ人女子留学生で、全員、日本語能力試験1～2級取得者である。対象者の詳細は以下の表1 本研究の対象者に示す。

表1 本研究の対象者

日本語学習年齢	20-30 代の女子留学生
日本語学習歴	4 年から 9 年
在日期間	1 年から 6 年 7 ヶ月
日本語学習開始年齢	15 歳から 22 歳

5. 本研究でのCSの定義とCSの種類

これまでの研究ではCSをさまざまに定義している（Gumperz1982、服部2001、ナカミズ2003など）。本研究では、CSの使用実態を文法的観点に注目し明らかにすることを目的とするために、CSを広く捉えることにした。CSを同じ会話や発話の中で2つ以上の言語を切り替えることとし、文と文の間の切り替え（以下、文間CS）のみならず、文の中での単語レベルにおける切り替え（以下、文中CS）もCSと考えることにした。また、名詞も文中CSの一つとして扱っているが、ベース言語であるタイ語に音韻的、形態素的に適応されているようなものは、借用だと判断し、本研究のデータから省くことにした。以下に、本研究で扱っている文間CSと文中CSの例文を示す。(1)の例文は

文間CSと文中CSの例である。

(1) T5: ตอนนี้ มี ตั้ง 30 คน เพิ่มขึ้น เยอะ
今 いる も 30 人 増える たくさん

(今はたくさん増えてきて30人もいる。)

T1: ทำไม เพิ่มขึ้น เยอะ จัง
どうして 増える たくさん そんな
(どうしてそんなにたくさん増えてきたの?)

T5: พอดี มัน เปิด คอร์ส ใหม่ คอร์ส ภาษาอังกฤษ
ちょうど 代名詞 開く コース 新しい コース 英語
ที่ えーと工学部と農学部
で

(ちょうど工学部と農学部で新しい英語のコースが開かれたの。)

T1: อ้อ ก้อยเลย มี พวก เด็ก 工学部 ไป เรียน เยอะ
そうか だから いる 達 学生 工学部 行く 勉強 たくさん
(そうか。だから、工学部に進む学生達がたくさんいるんだ。)

T5: เื่อ だから、日本語が出来なくていい。
そう

上記の(1)では、T5発言の「พอดีมันเปิดคอร์สใหม่เป็นคอร์สภาษาอังกฤษที่ えーと工学部と農学部」における「えーと工学部と農学部」とT1発言の「อ้อ ก้อยเลยมีเด็ก 工学部 ไปเรียนเยอะ」における「工学部」は、文の境界内部でタイ語から日本語に切り替えている文中CSの例である。それに対し、T5の最後発言の「เื่อ だから、日本語ができなくていい」における「だから、日本語ができなくていい」は、タイ語のあいづちから日本語の文に、文と文の間で切り替えている文間CSの例である。

6. 分析の手順

- 1) 文字起こしして得られた資料からすべてのCSを抽出する。
- 2) それぞれのCSを名詞や形容詞といった文中CSと、文やあいづちといった文間CSに分類し、それぞれの生起率の割合を出す。
- 3) タイ語から日本語へのCSの文法的カテゴリーを分類し、割合を算出する。文法的カテゴリーを算出する際、タイ人母語話者(1名)に協力してもらい、筆者の算出が適切であることを確認するため、全体データの20%(6組)について、筆者とタイ語母語話者の協力者が別々に算出し、その結果を持ち寄って一致率を出した。一致率は91%であった。

- 4) タイ語から日本語へのCSの文法的単位を洗い出す。
- 5) タイ語から日本語へのCSの文法的なルールを探る。

7. 分析の結果と考察

7.1 CSの文法的カテゴリー

まず、電話会話から取り出したCSを文中と文間に分ける。文中のCSは、名詞・複合名詞、名詞・動詞句、動詞、形容詞、副詞、その他の6つのカテゴリーに、文間のCSは、文、あいづちの2つのカテゴリーに分ける。そして、それぞれのカテゴリーの生起率が全体に対して、どの程度の割合を占めているかを割り出す。なお、複数回出てきた単語は、異なる人から発言された可能性があるので、分析する際、出てきた回数を全て、いわゆる述べ語数で算出することにした。詳細は図1を参照されたい。

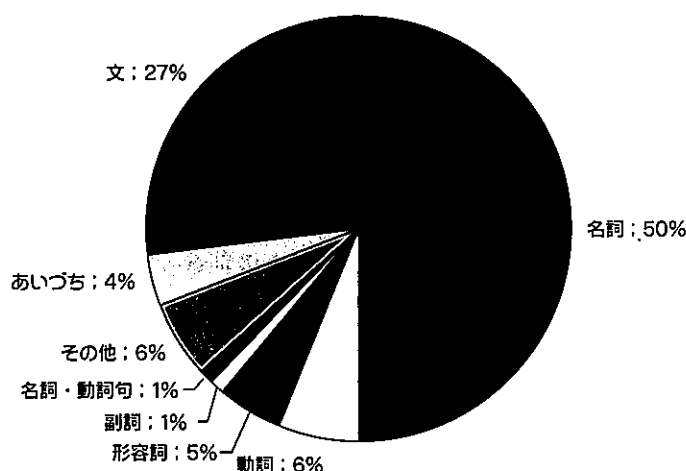


図1 全体データにおけるCSの文法的カテゴリー

上記の図1は、本研究における全体データを示している。図1で示されているように、全体のデータを見ると、文中CSは文間CSより圧倒的に多い。文中CSは全体データの70%程度を占めているのに対し、文間CSは30%程度しか占めていない。また、文中CSの中では、特に名詞が一番多く観察され、全体の半分を占めている。次に、動詞6%、その他6%、形容詞5%、副詞1%、名詞・動詞句の順で高い割合を占めている。一方、文間CSでは、文・節が一番多く、全体の27%を占めている。あいづちは全体データの4%である。

このように、全体データを見ると、文中CSは文間CSより生起率が高いことがわかった。その一つの理由は、本研究の資料特有の問題に関わっていると考えられる。また、本研究の資料では、タイ語が主に使われたタイ語ベースのデータは全体データの3分の2であるが、タイ語と日本語が同程度に使われたベースがないデータは3分の1しかなかった。したがって、上記の図1は、タイ語をベースにした場合におけるCSの文法カテゴリーにより近いと考えられる。

7.2 CSの文法的単位

本研究の資料では、タイ語から日本語へのCSにおいて、文中と文間CSが見られた。文中CSは文中のいろいろな単位で起きていることが観察された。以下に、それぞれの単位の例文を挙げながら説明する。なお、CSの文法的単位は、CSが文の中においてどこで行われているかを明らかにすることを目的とするため、記述する際、文中CSのみを分析の対象資料とする。

(1) 動詞

T1: แปลว่าพี่ T13 ชอบงานบริษัทมากกว่าเน่เลย

(っていうのは、T13 先輩は会社で働く方が好きでしょう。)

T13: คือพี่ทำอะไรก็ได้ พี่ก็เลย **困ってる** ไม่รู้จะทำอะไร

(私は何をやってもいいから、困ってる。何をしたらいいかわからない。)

(2) 形容詞

T10: เหตุผลที่อย่าก็อะไร จริงๆ แล้วแกก็สุดแสนจะ **強い** อยู่คนเดียวได้อะ

(離婚した理由は何なの？彼女は強そうに見えるんだけど。一人で生きていけそう。)

T4: เล้าแก่งนะพี่ เล้าแก่งที่ **強い** อยู่คนเดียวได้

(彼女は強くて、凄いのよ。一人で生きられると思う。)

(3) トピック・コメント文におけるトピック・コメントの部分

T5: ตอนนี้ ตาเข้าโรงพยาบาล ตอนนี้ก็มีแต่เรื่องราวคราคราะห์

(今、お爺ちゃんは入院してる。最近、悪いことばかり起きてる。)

T6: เออ ๆ

(うん)

T5: ตาเป็น **อัลツハイเมอร์**

(お爺ちゃんはアルツハイマーでしょう。)

(4) 複文における主節・従属節

T6: **ถ้าไปเจอตอนมันเป็น 悪性、サイズก็どんどん大きくなるสิ**

(悪性になってから見つからと、サイズがどんどん大きくなるし。)

T5: そうそう。痛くなってから、もう遅い。

T6: うん。大変だから。

T5: **ทันก็บอกพ่อว่า** 痛くなってから ถ้ามันเจ็บ มันมีอาการแล้ว **ガン** มันก็ลามไปหมดแล้ว **ก็** もう遅いแล้ว

(あたしも父に、痛くなってから、ガンの病状が出たら、もう広がってしまっていて、もう遅いと言った。)

上記の結果から見ると、本研究におけるタイ語から日本語へのCSはいろいろな文法的単位で起きていることがわかった。上記の(1)、(2)のような単語レベルの単位も、(3)、(4)のような文レベルの単位も観察された。また、上記に挙げられている例文の他にも、いろいろなCSの文法的単位が見ら

れた。例えば、名詞、副詞、名詞・動詞句、接続詞、終助詞、付加語、あいづちなどの単位も本研究の資料から観察された。このように、CSは文中において、さまざまところで行なわれていることが明らかになった。

7.3 CSの文法的ルール

7-3ではタイ語から日本語へのCSの文法的なルールを明らかにすることが目的である。また、文法的なルールを明らかにするために、7-2と同様に、文中のCSのみをデータとして分析することにした。本研究では、文法的なルールが6つ観察された。以下に、それぞれのルールについて例文を挙げながら説明する。

7.3.1 活用させた形の動詞に置き換える

文法構造についてタイ語は日本語と異なって、動詞・形容詞は時制を明示せず、活用もない言語である。時制を表す時は助動詞、または、時間を表す副詞を用いる。そのため、タイ語においては、動詞は、日本語で言う辞書形をとる。しかし、本研究のデータでは、タイ語から日本語へのCSを行う際、タイ語の文法構造を維持しながらも、辞書形の動詞ではなく、活用させた形の日本語の動詞に置き換えられる傾向が見られた。以下の(例1)と(例2)はその例文である。

(例1) T26: วันนั้นก็แบบ enlightenment มากเลย ^{ฉัน}อะ  เลยว่า^{ฉัน}หายแล้ว

(あの日は本当に悟った。あたしが治ったことを悟った。)

T8: อืม

(うん)

(例2) T14: แล้วเพื่อน T 14 กำลัง  แล้วที่มันไปปรึกษา เพราะมัน  ใจว่าแบบ

(私の友達は迷ってる。迷ってるから、相談しに行った。)

T10: แฟนคนนี้จะดีมัย

(この彼氏がいいかどうか。ハッピーエンドになるか。)

(例1)と(例2)では、タイ語の文法構造に従うのなら、動詞は辞書形が来るはずである。つまり、(例1)では「悟った」ではなく「悟る」が、(例2)では「迷っている」ではなく「迷う」という辞書形が来る。しかし、(例1)と(例2)が示すように、両方とも意味を保存するために日本語の文法構造で要求される「悟った」、「迷っている」が使われている。そこで、日・タイ間のCSルールの一つとして、日本語からタイ語へのCSを行う際、タイ語の文法構造に適用できるように、動詞を辞書形に変えるのではなく、日本語の動詞の活用形をそのまま持ち込んで置き換える可能性があることを挙げることができる。例えば、(例1)の場合では、「あの日」があることから、タイ語では、この文は過去形を表していて、動詞は「悟る」という形をとる。ところが、(例1)のように、動詞の位置でCSが起きた場合は、日本語のルールに従い動詞は活用している「悟った」に置き換わる。また、(例2)

の場合では、状態の継続を表す日本語の「～ている」に相当するタイ語の「กำลัง (kamlaŋ)」があることから、本来のタイ語の文法構造なら、現在進行形を表す助動詞の「กำลัง (kamlaŋ)」の後に、辞書形の動詞の「迷う」が来ることが考えられる。しかし、(2) が示すように、助動詞の「กำลัง (kamlaŋ)」の後は、「迷う」という辞書形をではなく、「迷っている」を使っている。そのため、上記の (2) では、状態の継続を表すタイ語の「กำลัง (kamlaŋ)」に同じように状態の継続を表す日本語の「～ている」が続き、二重に使われている。

7.3.2 語幹の部分のみ置き換える

日本語の動詞は語幹と語尾に分けられ語尾を活用させる。しかし、タイ語の動詞は語幹と語尾に分けることはできない。日本語の動詞「名詞＋する」は、他の動詞と異なって、例えば、「心配する」→「心配－を－する」に見られるように、助詞を入れることによって「する」を先行する語幹から分けることができる。本研究の資料では、このような動詞はCSを行う際、語幹の部分のみで動詞として使われる傾向が見られた。以下に、7.3.2.1「名詞＋スル」という動詞の場合、7.3.2.2「副詞＋スル」の場合、7.3.3.3 助動詞の後の場合の順で説明する。

7.3.2.1 動詞「名詞＋スル」

上述したように、日本語では、「名詞＋スル」は他の動詞と違って、先行する名詞と後行するスルの間には文の他の成分を入れることができる。一方、タイ語では動詞を語幹と語尾に分けることができない。したがって、本研究では、タイ語の動詞のところで日本語へのCSがある場合、日本語の動詞「名詞＋スル」を持ってくるべきところを、スルを取り除いた「名詞」だけを持ってくる傾向が多く観察された。以下の(例3)はその例文である。

(例3) T10: คำ  เรื่อง 英語

(英語のことを心配してる。)

T1: คือคนนึงคำเป็นคนเกาหลี คำบอกว่า 先生 โทรมาบอกเลยว่า ที่สอบไม่ผ่านเป็นเพราะภาษาอังกฤษ

(一人の韓国人は、英語のせいで不合格だったと先生から電話があったと言った。)

上記の(例3)では、タイ語の構造の中に埋め込まれた「心配」は動詞として使われている。本来、動詞として使う場合は、「心配する」という先行する名詞の「心配」と後行する「スル」を持ってくる必要がある。本来の日本語の文法構造では、ただの語幹の「心配」は動詞として使えない。しかし、タイ語から日本語へのCS文になると、日本語の動詞「名詞＋スル」を持ってくるべきところを、スルを取り除いた「名詞」だけを持ってくるのが許されていることがわかった。また、「心配(スル)」の他に、「我慢(スル)」、「研究(スル)」、「勉強(スル)」なども多く観察された。

7.3.2.2 動詞「副詞＋スル」

本研究の資料では、日本語の「副詞＋スル」から「副詞」の部分のみを置き換えて、動詞として使う例が観察された。「副詞＋スル」は7.3.2.1の「名詞＋スル」という動詞の場合と同様に、日本語で

は、「副詞＋スル」を先行する「副詞」の部分と後行する「スル」という2つの語幹に分けることができる。また、上述したように、タイ語では、動詞を語幹と語尾に分けることができない。そのため、タイ人留学生はタイ語の動詞のところで日本語へのCSを行なう場合、日本語の動詞「副詞＋スル」を持ってくるべきところを、スルを取り除いた「副詞」だけを持ってくるのが観察された。なお、以下の(例4)はその例文である。

(例4) T1: ไปดูยังมือถือ ไปดูที่ 新宿

(新宿へ携帯を見に行った?)

T3: ยัง ยัง

(まだ。まだ。)

T1: อ้าว

(そう?)

T3: ก็น่า じっくり พี่ じっくり ในเรื่องแบบนี้

(まあ、じっくり。私はこういうことに対してゆっくりしている。)

上記の(例4)では、タイ語の構造に埋め込まれた「じっくり」は動詞として使われている。本来の日本語の構造では、語幹の「じっくり」のみで動詞としての働きを持たず、「ゆっくりしている」を使わなければならない。しかし、タイ語から日本語へのCSの文法構造では、日本語の動詞「副詞＋スル」を持ってくるべきところを、スルを取り除いた「副詞」だけを持ってくるのが許されていることがわかった。そこで、上記(例4)のようなタイ語から日本語へのCS文は、タイ語の構造の中に「じっくり」を挿入して、動詞として使う傾向が観察された。また、「ゆっくり(スル)」の他に、「はっきり(スル)」、「しっかり(スル)」などにも同様の傾向が見られた。

7.3.2.3 助動詞の後

助動詞文について、英語とタイ語のようなSVO言語と日本語のようなSOV言語の間に、違いが見られる。前者の場合は「助動詞＋動詞」という順番になっているが、後者の場合は「動詞＋助動詞」という順番になっている。例えば、日本語の「食べさせる」が動詞の「食べる」＋助動詞の「させる」の順番になっているのに対し、タイ語は助動詞の「hài させる」＋動詞の「kin (食べる)」の順番になっている。また、7.3.2.2で述べたように、タイ語の動詞のところで日本語へのCSがある場合、日本語の動詞「名詞＋スル」を持ってくるべきところを、スルを取り除いた「名詞」だけを持ってくる傾向が見られた。したがって、本研究の資料では、助動詞と動詞の位置で起きる日本語へのCSは、「タイ語の助動詞」＋「スルを取り除いた日本語の「名詞」」の組み合わせが観察された。以下の(例5)はその例文である。

(例5) T1: พี่ T10 ทำหัวข้ออะไรเธอ

(T10先輩のテーマは何ですか。)

T10: เรื่อง 留学生

(留学生のこと)

T1: อ้อ เรื่อง 留学生

(ああ、留学生のこと)

T10: ไม่รู้เป็นยังไง รู้สึกเบื่อมากเลย คือ 研究 อะ ~~อยาก~~ แต่ก็เรียน ~~อยากกลับไป~~ เมืองไทย

(どうしてかわからないけど、私は凄くつまらない。研究は研究したいけど、勉強を怠けてる。

タイに帰って、研究したい。)

上記の(例5)では、日本語の「研究したい」に対し、タイ語から日本語へのCS文では、タイ語の助動詞の「yàak (～したい)」と日本語の「名詞＋スル」という動詞から名詞の部分の「研究」だけを持って来ている。本来のタイ語の構造なら、助動詞の「yàak (～したい)」の後に、動詞が来るべきであるが、上記の(例5)では、「研究＋スル」という動詞から先行する部分の「研究」のみを持ってきて、動詞として使っている。また、上記の例の希望を表す「～したい」の他に、使役文の「～させる」に対応するタイ語の助動詞の「hâi」、「～しなければならない」に対応するタイ語の助動詞の「tɕŋ」と「～しに行かなければならない」に対応するタイ語の助動詞の「pay」と、日本語の「名詞＋スル」からスルを取り除いて、先行する「名詞」のみの組み合わせも観察された。

7.3.3 タイ語の否定辞の後を日本語の名詞・形容詞・動詞に置き換える

7.3.2の助動詞文と同様に、否定文においても、英語とタイ語のようなSVO言語と日本語のようなSOV言語の間に、否定辞の位置の違いが見られる。前者(タイ語)では、「否定辞＋動詞」の順番で、後者(日本語)では、「動詞＋否定辞」の順番になっている。本研究では、この否定辞と動詞の位置で起きる日本語へのCSは「タイ語の否定辞(mây)＋日本語の動詞」の組み合わせが観察された。また、動詞の否定文の他、名詞の否定文においても、「タイ語の否定辞(mây chây)＋日本語の名詞」の組み合わせが見られた。以下の(例6)は名詞の例で、(例7)は動詞の例である。

(例6) T4: แล้วนี้คบกันนานหรือยังคะ

(付き合ってから長いんですか。)

T23: ตุลาคมจะสี่ปีคะ

(今年の10月で4年。)

T4: うそ

T23: จริงคะ ~~ไม่ใช่~~

(本当。うそじゃない。)

(例7) T17: ไปเมื่อไหร่

(いつ行くの?)

T3: ยังไม่รู้เลย ยังไม่ ~~決~~ ชาติ

(まだわからない。まだ決まってない。)

上記の(例6)は名詞の否定文の例である。タイ語の否定辞の「mây chây」の後は、日本語の名詞の「うそ」に置き換えられている。また、(例7)は動詞の否定文の例である。タイ語の否定辞の「mây」の後は、「決まった」に置き換えられている。本来のタイ語の構造なら、否定辞の「mây」の後は、活用させない辞書形の動詞に置き換えるべきである。したがって、(例7)の「決まった」という動詞に対し、「決まる」が使われるべきである。しかし、上述の7.3.1で述べたように、タイ語から日本語へのCSルールの一つとして、活用させた形の動詞に置き換える傾向がある。否定文の場合も例外ではない。したがって、(例7)では、タイ語の否定辞の「mây」の後に、「決まる」のではなく、「決まった」が使われている。また、(例6)のようなタイ語の否定辞の「mây chây」と日本語の名詞の組み合わせと(例7)のようなタイ語の否定辞の「mây」と活用させた日本語の動詞の組み合わせの他に、本研究の資料では、「タイ語の否定辞(mây) + 活用させない日本語の形容詞」の組み合わせも観察された。一つの例として、日本語の「危なくない」に対し、タイ語から日本語へのCS文には、「ไม่ (mây) 危ない」が使われた。「ไม่ (mây) 危ない」は、タイ語の否定辞の「ไม่ (mây)」と活用させない日本語の形容詞の「危ない」の組み合わせから成り立っている。

7.3.4 数字の場合、数字と単位の間で切り替えられる

本研究の資料では、数字についてタイ語の数字と日本語の単位の組み合わせが多く観察された。その中でも、タイ語の数字と日本語の「～万」という単位の組み合わせが多く見られた。以下の(例8)はその例文である。

(例8) T10: ถ้าตายจะต้องเตรียมไว้ ~~สามร้อย~~ ^{สาม} แสน ข้อนี้นี้ไม่มีประสบการณ์

(死ぬなら、お金を何万か準備しなきゃいけないか。こういうことは経験がない。)

T14: อื้ จริงเปล่า

(あ、本当?)

T10: เธอเค้าบอกอย่างน้อยจะต้อง ~~สามร้อย~~ ^{สาม} แสน ต้องเตรียมไว้ นะ อะไรอย่างนี้ แบบคนเราชีวิตอะไรมันจะกันนักกันหนา

(うん。彼女は最低で、3百万を準備しなきゃいけない。こんな感じ。人の人生はどうしてそんなに面倒臭いの?)

T14: หือ

(うん)

T10: พอพี่บอกว่า ~~สามร้อย~~ ^{สาม} แสน ไปซื้อบ้านเมืองไทยได้เลยนะ ไม่ได้แค่จัดงานศพ

(私は3百万なら、タイでは葬式じゃなくて、家を買えるよと言った。)

上記の(例8)はタイ語の数字と日本語の単位の「万」の組み合わせの例文である。T10の発言の「^{สี่} 万」では、「^{สี่} (何)」はタイ語で、「万」は日本語である。そして、同じT10の発言の「3 ^{ร้อย} 万」では、「3 ^{ร้อย} (三百)」はタイ語で、「万」は日本語である。実際には、タイ語の数字の数え方は日本語と異なって、「百万」という数え方は使われない。タイ語の数え方は英語と同様に、英語の「million」

に当てはまるタイ語の「ล้าน (láan)」がある。そのため、本来のタイ語では、「3 ร้อย 万 (三百万)」という言い方が使いにくく、「3 ร้อย 万 (三百万)」の代わりに、「3 ล้าน (3 láan)」が使われるはずである。しかし、上記の(例8)のように、タイ語から日本語へのCS文になると、「3 ร้อย 万 (三百万)」という数え方が許されていると言えよう。

7.3.5 トピック・コメント文⁽³⁾の場合、トピックとコメントの間で切り替えられる

タイ語は日本語と同様に、トピック・コメント文が使われているが、基本的には、日本語のように「は」、「が」のようなトピックマーカーは存在していない。タイ語では、日本語と異なって、トピックとコメントの境界線がはっきりしておらず、トピックとコメントは並列の関係をとる。本研究の資料では、トピックの部分はタイ語で、コメントの部分は日本語へのCSが見られた。以下の(例9)はその例文である。

(例9) T5: ผลเลือด 脾臟 อะนะ เขาผลเลือดไปให้โรงพยาบาลรามา โรงพยาบาลรามาคำนูณิ์ ทำไมญี่ปุ่นมันสามารถ
ออกผลได้ขนาดนี้วะ

(脾臓の血液検査結果なの。検査結果をRama病院に持って行ったら、Rama病院の先生はそれを見て、「なぜ日本ではそんな結果が出せるの?」と言った。)

T7: อ้อ

(うん)

T5: เมืองไทย このような数字は出せない。

(タイでは、このような数字が出せない。)

上記の(例9)では、T5の発言の「タイでは、このような数字が出せない。」は、タイ語のトピックの「เมืองไทย (タイ)」と日本語のコメントの「このような数字が出せない」の組み合わせである。そして、上述したように、タイ語では基本的にトピックマーカーが存在していないので、日本語の「タイでは」に対し、タイ語は「เมืองไทย (タイ)」のみが使われている。このように、トピックマーカーがないタイ語において、トピックとコメントの間で、タイ語から日本語に切り替えることによって、トピックとコメントの境界線をより際立たせていると考えられる。

7.3.6 複文の場合、主節と従属節の間で切り替えられる

最後のCSルールとして、複文の場合は主節と従属節の間が切り替えられるということが挙げられる。本研究のデータでは、従属節がタイ語で、主節が日本語になっている例文と、その反対に、従属節が日本語で、主節がタイ語になっている例文が観察された。以下の(例10)は前者の例文で、(例11)は後者の例文である。

(例10) T6: ถ้าไปเจอตอนมันยังเป็น 悪性 サイズがどんどん大きくなるし。

..(悪性になってから見つかった、サイズがどんどん大きくなるし。)

T5: そうそう。痛くなってから、もう遅い。

T6: うん。大変だから。

T5: ^{ขึ้น}ขึ้นก็บอกพ่อว่า 痛くなってから ถ้ามันเจ็บ มันมีอาการแล้ว กาน มันก็อลามไปหมดแล้ว ก็อもう遅い
(あたしも父に痛くなってから、痛くなってから、ガンの病状が出たら、もう広がってしまっていて、もう遅いと言った。)

(例 11) T5: ถ้าตายบ้านเราได้ ๒ ล้านนะ

(タイで死んだら、2 百万もらえるよ。)

T15: ^{รู้}รู้ไป 香港經由 香港經由 แล้วกลับบ้านดีกว่า

(わかった。香港經由、香港經由。そして、家に帰った方がいい。)

T5: เออ

(うん)

T15: ~~香港經由でタイに帰って、死んだら、2 百万は家族にあげる。~~

(香港經由でタイに帰って、死んだら、2 百万は家族にあげる。)

上記の(例 10)では、T6 の発言の「悪性になってから見つかる」と、サイズがどんどん大きくなるし」は従属節の「ถ้าไปเจอตอนมันเป็น 悪性 (悪性になってから見つかる)」がタイ語で、主節文の「サイズがどんどん大きくなるし」が日本語である。また、上記の(例 11)では、T15 の発言の「香港經由でタイに帰って、死んだら、2 百万は家族にあげる。」は、従属節の「香港經由でタイに帰って」が日本語で、主節の「พอตายแล้ว ๒ ล้านก็ให้ที่บ้านไป (死んだら、2 百万は家族に上げる)」がタイ語である。このように、複文の場合は主節と従属節の間で、切り替えられる。また、従属節がタイ語で、主節が日本語である場合と従属節が日本語で、主節がタイ語である場合の両方がある。

8. まとめ

本研究では、日本語からタイ語への CS の使用実態を文法的観点から分析した。まず、本研究で観察された CS の生起率を割り出した結果、文中 CS は文間 CS より圧倒的に高い割合を占めていることがわかった。次に、タイ語から日本語への CS における文法的単位を調べた結果、CS はいろいろな単位で起きていることが明らかになった。名詞、形容詞のような単語レベルの単位も、複文における主節・従属節のような節レベルの単位も見られた。そして、接続詞、あいづち、付加語などの単位も観察された。最後に、タイ語から日本語への CS は文法的なルールが見られるかを分析した。結果として、CS ルールが存在していることが明らかになり、本研究では、6 つのルールが観察された。その中には、本来の日本語やタイ語の文法構造なら許されないが、CS の文法構造だからこそ、許されるものも見られた。例えば、動詞が活用しないタイ語の構造において、活用させた日本語の動詞を用いること、また、「名詞＋スル」、「副詞＋スル」という動詞のスルを取り除いた「名詞」、「副詞」の部分のみを用いることが観察された。また、否定文における日本語への CS については、否定辞と動詞・形

容詞・名詞の間に、「タイ語の否定辞+日本語の動詞・形容詞・名詞」の組み合わせが多く見られた。さらに、数字と単位で起きる日本語へのCSについて、「タイ語の数字+日本語の単位」の組み合わせやトピック・コメント文や複文における主節と従属節の間に、文や節単位で切り替えられるものも観察された。

上記の結果から、タイ語と日本語のような異なる文法体系や文法的な規則を持っている言語間においてCSが行われることが明らかになった。また、文法構造に関して、Joshi(1985)のマトリックス・ランゲージ・アプローチ (Matrix Language Approach) と同様に、本研究ではタイ語から日本語へのCSを分析対象としたため、基盤となるタイ語の文法構造に日本語の成分が埋め込まれた例文が殆どであった。しかし、Di Sciullo et al.(1986)の支配・束縛アプローチ (Government - Binding Approach) に対し、本研究では、支配関係が存在しない語彙と語彙の間のみならず、支配関係が存在する動詞と助動詞の間、否定辞と動詞の間にもCSが観察された。このように、CSには文法的制約が存在しているが、全ての言語に適用できない可能性があると示唆された。

9. 今後の課題

本研究では、タイ語母語話者場面におけるタイ語から日本語へのCSを文法的観点に注目して、分析を行った。しかし、タイ人留学生のCS使用実態を明らかにするために、タイ語から日本語へのCSのみならず、日本語からタイ語へのCSの文法的特徴も追求する必要があると考えられる。そこで、今後は日本語からタイ語へのCSの文法上の特徴を明らかにすることを試みたいと考えている。

また、本研究では、タイ語から日本語へのCSの文法上の特徴を明らかにした。しかし、CSの使用実態をより理解するために、本研究で観察されたルールは単なるタイ語と日本語間のルールであるか、または、CSには普遍的な文法的ルールがあるのかも追求する必要があると考えられる。したがって、今後はCSを文法的観点から分析したタイ語と日本語以外の言語の先行研究の結果と照らし合わせて、CSの普遍的なルールを追求することを試みたい。

¹ 挿入型CSとは、A言語の文法構造に影響を与えずに、挿入されるB言語の単独項目のことである。

² 借用は、X言語の言語要素をY言語に取り込むことをさす。

例えば、「彼はとっても~~アホ~~なよ。」(岡1995:124)

³ 本稿でいうトピック・コメント文とは、話し手によって特に取り上げられ、他の事柄から取り立てられる部分(トピック)とその話題を説明する部分(コメント)から成り立つ文を指す。

参考文献

- (1) 岡秀夫 (1995) 「二言語使用者のコード・スイッチングに関する社会言語学的研究」『平成6年度～8年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書』, 122 - 123.
- (2) 金美善 (2003) 「混じり合う言葉ー在日コリアン一世の混用コードについて」『言語ー特集 移民コミュニティの言語』36, 大修館書店, 46 - 52.
- (3) 久保田満理子 (2003) 「英語話者が日本語でコミュニケーションする際生じる問題」宮崎里司 / ヘレン・マリオット (編集)『接触場面と日本語教育ーネウストブニーのインパクトー』, 明治書店, 185-196.
- (4) ナカミズ・エレン (2003) 「コード切り替えを引き起こすのは何か」『月刊言語ー特集 移民コミュニティの言語』36, 大修館書店, 53 - 61.
- (5) 服部圭子 (2001) 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング機能を中心に」『多文化社会と留学生交流』第5号, 大阪大学留学生センター, 39 - 58.
- (6) Di Sciullo, A., Muysken, P., and Singh, R. (1986) Government and code-mixing, *Journal of Linguistic*, 22, 1 - 24.
- (7) Gumperz, J. (1982) *Discourse strategies*, Cambridge University press.
- (8) Hoffman, C. (1991) *An Introduction to Bilingualism*, Longman
- (9) Joshi, A. (1985) Processing of sentences with intrasentential code-switching, *Natural Language Parsing*, 190 - 205. Cambridge University Press.
- (10) MaCSwan, J. (2000) The architecture of the bilingual language faculty : evidence from intrasentential code - switching, *Bilingualism Language and Cognition*, 3(1), 37 - 54, Cambridge University press.
- (11) Nishimura, M. (1997) *Japanese / English code-switching : syntax and pragmatics*, Peter Lang Publishing, Inc.
- (12) Poplack, S. & Sankoff, D. (1981) A formal grammar of code-switching, *Papers in Linguistics : International Journal of Human communication*, 14, 1 - 45.
- (13) Prasithrathsint, A. (2002) *Language in Thai Society : Diversity, Change, and Development*. Chulalongkorn University.